SCJ 49

サイクロン被害から1年

ミャンマーのお母さんのこと

ERAジャパンの浅井氏

いつも元気な林田さん



Cover Story
[表紙]



2008年6月、サイクロン発生から1ヶ月経ったミャンマー。SCのサポートする「チャイルド・フレンドリー・スペース（子どものための安全な遊び場）」で撮影しました。躍動する少年たちのエネルギーが伝わってきます。

©Save the Children Denmark / Louise Dyring Nielson

About Booklet
この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

SCJ 49

Contents

4 [SCJ Report] 活動報告：ミャンマー
サイクロン復興支援

7 [From Children] 子どもたちからあなたへ
子どもたちの心のケア

8 [SCJ Report] 活動報告：ミャンマー
子どもの健康と栄養事業

10 [Toy Box] ミャンマーのおもちゃ箱

11 [Stakeholder Interview] 特別インタビュー
イーアールエー・ジャパン株式会社
常務取締役 研修企画部部長 兼 国際部部長 浅井 稔氏 インタビュー

12 [Staff Episode] SCJの一員として
事業部 中近東・アフリカ・中南米 林田麻理子

14 [Topics] [Information]

15 [World's Picture] どうしても載せたかった写真

発　行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
Phone 03-6859-0070（代表）

印刷協力：株式会社コア（この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています）

[スタッフ]
デザイン・編集：株式会社ピーアールハウス

SCJ Report

活動報告

ミャンマー

～ サイクロン復興支援 ～

サイクロン「ナルギス」の被害から1年

復興支援の様子をお伝えします



嬉しそうにボートに乗る子どもたち





駐在スタッフ
大須賀 智子
Tomoko Osuga

どんなことが起きても たくましく生きる 子どもたちのために

昨年5月3日未明、サイクロン「ナルギス」がミャンマーを襲い、たった一夜で本当に多くの子どもたちの生活が一変してしまいました。

親や兄弟姉妹を失った子ども、生きていく支えを吹き飛ばされてしまった子ども。そういった子どもたちに対して、セーブ・ザ・チルドレンは、皆さまからの多大なご支援のおかげで、災害直後から1年間、活動を続けることが出来ました。



トントン 31歳
「災害直後はNGOの食糧配布を受け、復旧作業に従事して賃金を得ていました」



無数の海峡と分流する河川が伸びるデルタ地帯。ボートで通学する子どももいる



ティンティンと息子のシン・タン・トゥッ
「息子はサイクロンの翌朝に生まれたので、きっと強い人間に育つと思います」



アウン・コー・ラット 12歳
「家族の収入は義兄が漁で支えてくれます。安心して学校に通えるようになりました」

生活基盤を立て直すために子どもの家族にボートを配布

今年2月中旬、エヤワディ管区デルタ地帯のカザーン・イワー！マー村には、木製の真新しいボートが水上に浮かびました。これは、サイクロンでボートや漁具を流され、生活の手段を失ってしまった地元の漁民に提供したものです。贈呈式の日、村中の人々が川べりに集まってくれました。

漁民グループの一員としてボートを受け取ったエビ漁師のトントン。サイクロンの時は4人の子どもを頑丈な家の屋根に登らせ、自分は木に登り、一晩中しがみついて生き延びたそうです。

「昨日まで、漁に出るのにお金を払ってボートや魚網を借りていたんだ。今日からは、ボートを借りていた分のお金が浮くので、ちょっと余裕が出来るし、子どもたちのこれからのことも考えるゆとりが出来るかな」と、嬉しそうに語ってくれました。

子どもの確かな成長のために、保護者の収入の安定を目指しています


ボートを前にして。贈呈式の日の村人と大須賀スタッフ

これからも継続して ミャンマーの 復興支援に尽力

地域が本当の意味で復興するためには、災害が起きた時だけでなく、その後の継続的な支援が必要です。今回の被害者の中で約100万人が農業や漁業、家畜や養殖業などの生計手段を失いました。十分な収入がなければ、子どもは病院にも、学校にも通えなくなります。長い目で見て、子どもの確かな成長のことを考えると、子どもを含めた地域全体を支援することが大きな鍵となります。その視点に立って、漁民に対する生計支援を始めました。

現在支援を行っているのは、死者、行方不明者の6割が集中したエヤワディ管区内でも支援の行き届いていない75の村です。住民の多くが、河川の広がる豊かな自然環境を活かして沖合、沿海漁で生計を立てています。特に水田などの土地を持たない家庭の多くは、近隣に流れる河川で小型魚網を使い小魚や小エビを捕ることで、最低限の食糧を確保し一家の生活を支えてきました。

しかし1年前の暴風、豪雨、海からの高波で、住民は漁業道具やボートなど、命綱ともいえる資産を失いました。ボートの損壊で水路での移動が制限され、漁業活動が著しく困難になりました。

住民の食糧・収入確保を目的とした今回の支援は、3537世帯を対象に、2376隻のボート、特に農地を持たない住民を対象に2250式の小型魚網を配布しました。ボートは管区内の業者によって製造されたもので、水路を利用して村々へ搬送。ボートの大きさなど、住民のニーズに合わせて揃えました。同時に、メンテナンスのための工具配布や研修なども実施しました。基本的な家計管理についての研修も行い、子どもの教育や病気など、いざという時のための貯蓄を奨励しました。その後の視察で、住民の収入が少し上向きになり、食事の摂取量も増えたと報告を受けました。

今回のボート配布で、子どもたちにも嬉しいことが起きました。ボートは漁業用ですが、子どもたちの通学用にも役立っています。ボート配布前は、学校まで長距離を歩かねばならない、乗合ボートもあるものの数が限られているなど、通うことが困難な状況にありました。今はボートのおかげで出席率が上がったという現地の声を聞きました。

船出のとき



※この漁業生計支援は、ジャパン・プラットフォームの助成を受けて実施しました。この1年間に皆さまからいただいたご寄付・ご協力に心から感謝いたします。

子どもたちからあなたへ
From Children
Union of Myanmar

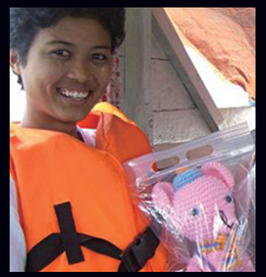
子どもたちの心のケア
フェリシモのハッピートイズ ミャンマーの子どもたちにも配布しました


「ぬいぐるみをありがとう」もらったぬいぐるみを大事に抱えるコー・ペイくん

ぬいぐるみを 大切そうに抱いて 喜ぶ子どもたち

セーブ・ザ・チルドレンでは、特に弱い立場にある子どもの保護に力を入れています。その一環として、これまでも多岐に渡ってご支援をいただいている株式会社フェリシモの「ハッピートイズプロジェクト」より、ぬいぐるみ計2000個の寄贈を受け、ミャンマーの子どもたちへの配布を行いました。

ぬいぐるみは、病気を抱えたり、心に傷を負った子どもを癒してくれます。ある子どもは、遊ぶ時以外は大切にビニール袋に入れて保管しており、その様子が印象的でした。


配布に参加した現地スタッフ

SCJ Report

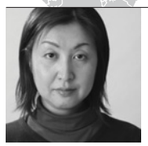
活動報告

ミャンマー

～ 子どもの健康と栄養事業 ～

母親が変われば、子どもも健康に

～わが子のために、栄養を学ぶお母さんたちの話～



駐在スタッフ
和田美穂
Miho Wada

根拠のない迷信により5歳の誕生日が迎えられない子どもたち

もうひとつミャンマーのお話です。人口の約40％を18歳以下の子どもが占めるミャンマーでは、10人に1人が5歳の誕生日を迎えることができずに亡くなっています。栄養失調や下痢などが主な理由ですが、それは食べ物の不足というよりも、昔から伝わる根拠のない知識によるもの。村全体で「子どもは野菜を消化できない」「子どもに豚肉を食べさせると咳が出る」といった迷信が信じられているのです。

母親たちの意思で「栄養」へ関心を持ってもらうためにまずは信頼関係を築く

新しいことに挑戦することは、誰にとっても抵抗があるもの。私たちがカレン州パアンで栄養事業を始めようとした時も、母親たちは「畑仕事があるし、時間を取られるならできない」と、なかなか参加してもらえませんでした。

3人の母親であるタマウ村のタ・ブーもその1人。しかし押しつけではなく、彼女たちの意思で参加してほしいとの考えから、時間をかけて説明、説得しました。世間話から始めて、まずは友人として信頼されるように心がけ、少しずつ事業に関心を持ってもらうように試みました。

SCJが行う栄養給食ワークショップで食事や衛生について学ぶ

栄養事業では3歳未満児とその母親を対象に、まず子どもや妊婦に必要な栄養素や衛生などを学びます。今まで害があると信じていた食材が健康によいということをそこで初めて知ります。その後、給食セッションの時間を設け、栄養バランスの取れた食事を皆で作ってみます。もちろん「食事前に手を洗う」ことも大切な研修のひとつです。

学んだ後は家庭で実践します。タ・ブーの家を訪ねてみると、研修を受けてから白米だけでなく、ビタミンやたんぱく質を含む野菜や肉を食べさせるようになったそう。「栄養知識が身について、今ではとてもよかったと思う」（タ・ブー）


ご飯を食べるタ・ブーの2歳の姪ムー・ムーエーちゃん


タ・ブーと和田スタッフ。研修で習った食事を家でも実践


栄養について学んだ後は、実際に食事を作る


子どもの栄養をテーマにポスター教材で研修中


研修の様子。真剣に話を聞く母親たち

栄養状態の改善による子どもたちの変化で大人がますます積極的に

このように子どもの栄養状態に真剣に向き合うようになった母親たち。毎月恒例の体重測定の日、我が子の栄養状態が初めて「良好」と診断された瞬間、喜びのあまり飛び上がって、民族舞踊を踊り出す母親も。ミャンマーの女性は日頃おとなしい性格ですが、その母親の喜ぶ姿を見て、事業に関わってきたスタッフたちも本当に嬉しく思いました。

最近では、村人たちが活動の価値を認め、村のボランティア主体で研修を実施するまでになっています。地元の人たちが主体的に、持続的に活動を続けてくれることも大きな成果です。

※SCJは2006年より、「JICA草の根技術協力事業」の助成を受けて、カレン州パアンの30村、約1200人を対象に、「子どもの健康と栄養事業」を展開しています。子どもの定期的身体測定、保護者や地域住民への子どもの健康・栄養に関する行動変容研修、ハエ防止型トイレの設置、医療サービス改善のための医療施設の修繕、母子健康手帳の利用研修を行っています。

Toy Box
ミャンマーのおもちゃ箱



遊ぶことは学ぶこと。
遊びは子どもたちの笑顔を生み、協調性や創造性を豊かにします。
世界中の遊びや玩具を通して、子どもたちの世界を覗いてみましょう。



柔軟性を活かしてつなぐ曲芸のようなボール遊び

ミャンマーでは数人で輪になり、足や頭などを使ってボールを地面に落とさないように回す「チンロン」がポピュラーです。子どもたちは体の柔らかさを活かしてボールをつないでいきます。また2チームに分かれ、ネット越しに競う「セパタクロー」という伝統スポーツも。見たことのある人は、曲芸さながらの動きに目を奪われることでしょう。

協力：日本玩具博物館

Stakeholder Interview
特別インタビュー 2



人の役に立つことで、初めて企業として社会貢献ができる

イーアールエー・グループは、世界40ヶ国以上に加盟店を持つ不動産ネットワークです。イーアールエー・ジャパンでは、2008年にSCJとパートナーシップを提携。現在、全国の加盟店で募金箱を設置しています。子どもに対する考え方や企業のCSRについて伺いました。

イーアールエー・ジャパン株式会社

常務取締役　研修企画部部長 兼 国際部部長 **浅井 稔**氏 Minoru Asai



毎日の出来事を楽しむ子どもの純粋さから大人たちも学ぶべき

通勤途中のモノレールで、子どもに関する印象的な出来事があります。遠足だったのでしょうか、同じ車両に20名ほどの幼稚園児が乗車していました。陽気にはしゃぐ子どもたちに目を細めていると、運転士が突然、急ブレーキをかけました。

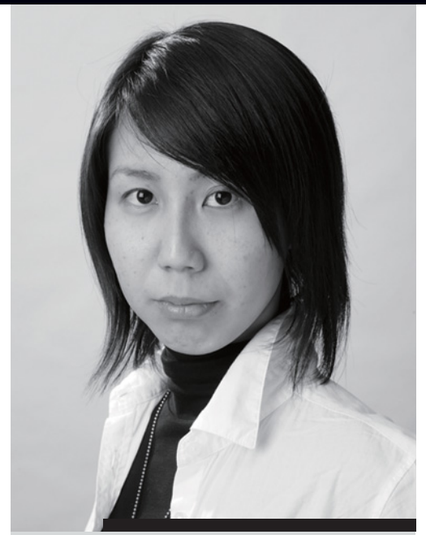
すると、隣に立っていた50歳代の男性が「ひどい運転をしやがって」と不機嫌そうに舌打ちしたのです。彼の言葉に同調しかけたところ、子どもたちを見ると彼らは予想外の出来事に無邪気に喜んでいたんです。否定的な姿勢で構えている大人と、毎日起こることが楽しくてたまらない子どもとの世界の見方の違いを実感した、印象的な出来事でした。

毒されている大人の方こそ、子どもから学ぶべきことがあるのではないでしょうか。

人を大切にすることは最終的に自分自身にもよい結果をもたらす

私どもが考える営業の仕事とは、お客さまの問題点や希望を探し、プロとしての解決策を提案することです。営業担当者の研修業務を担当していて、いつも痛感することは、力で押すだけの営業は決してうまくいかないということ。実際、「お客さまの話をじっくり聞こう」「お客さまの役に立ちたい」というスタンスを持つ担当者の成績が伸びています。

お客さまに喜んでもらうことができれば、企業として「価値」を創造することにつながり、そこで初めて社会の役に立てたということになります。また、相手のためを思って行動するということは、家族関係や友人関係にも当てはまることです。人を大切にすることで「助け合う世界」をつくる一翼を担っていければと願っています。



セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
事業部 中近東・アフリカ・中南米

林田麻理子
Mariko Hayashida

現地の市民の声を政府へ、そして日本へ届ける架け橋になりたい

日本国際民間協力会を経て、2008年1月にSCJに入局。今年3月より、中近東・アフリカ・中南米の支援に携わる林田スタッフの、NGO活動に携わるようになったきっかけや仕事のやりがい、今後の抱負に迫ります。

活動を通して人が変わるその瞬間に立ち会えるやりがいのある仕事

「ドライバーだから、それ以上の質問には答えられないよ」以前所属していたNGOで緊急支援に携わった時のこと。新しい活動地だったこともあって現地の感覚や習慣にまだ慣れずにいた頃、「本当に必要な支援って何だろう」と必死に考えていた私は、同行していた現地のスタッフドライバーに意見を求めました。その時に彼から返されたのがこの言葉。「自分はあくまでドライバーだから、返事に責任を負えない」ということでした。でもその後、ドライバーとして支援に関係するあらゆる場所へ行動を共にするうち、徐々に彼の態度が変わっていったのです。活動について意見を出すだけでなく、時には率先して体を動かし手伝ってくれました。私たちの様々なやり取りを見ていて、活動の意義を見出し、「自分も何かしたい」と行動に出てくれたのです。その彼の変化が、活動のより深い意義を気づかせてくれました。

このように「活動を通して人が変わっていく」経験を通じて、NGOで働くというモチベーションが高まっていきました。仕事は毎回違うことに挑戦できて新鮮ですし、強くやりがいを感じています。

世界の問題と自分の問題そのつながりに気づくことが貴重な第一歩

昨年、SCJで「スピーキングアウト」プロジェクトを担当したことは、とてもよい経験となりました。スピーキングアウトとは、日本の子どもたちに対する支援のひとつ。ワークショップなどを通じ、日本も自分も問題を抱える世界の一部であることに気づき、問題解決のために一緒に考え、行動を喚起するプログラムです。

毎回子どもたちから、予想外の発想が出てきて、驚かされることばかり。「子どもたちの劇的な変化が職員室で話題になる」と、学校の先生から伺いました。

スピーキングアウトを行う際は、何をしても、何を言ってもいいという雰囲気作りを大切にしますが、そうなるまでにはある程度の時間が必要。ある時、最初はアンケートにポジティブな感想を書いていた高校生が、しばらくしてから「活動は楽しかったけど、これくらいのことは前から知っていた」とコメントしました。逆説的な話かもしれませんが「本音が話せる環境になった」と、嬉しく感じたエピソードです。



スピーキングアウトの様子。「思い」をまわりの皆と共有できる、何でも話せる雰囲気作りが大切



子どもたちとアイデアを出し合いながら話し合う。右から2番目が林田スタッフ

ヨルダンをはじめ中東には働けない、学校に行けないイラク難民が多数存在する

今年の3月から、事業部で主にヨルダンを担当しています。日本から現地がより動きやすくなるようにサポートしています。

現在SCJでは、就学前の子どもたちを支援しています。ヨルダン人口のうち、10人に1人はイラク難民という中、幼稚園に受け入れることのできる人数をはるかに超えた子どもたちがいます。さらに、通園の足がなかったり、経済的な理由などから幼稚園に通えない子どもも多数います。そこで、幼稚園への支援に加え、家庭における教育に関しても活動を開始しました。

イラク難民はヨルダンで働くことが出来ないためイラクで大学を出た健康な大人が仕事に就けません。また、いじめられることを恐れて学校に通わない子どももいると聞きました。本来、出来るはずのことが出来ないということは、きっと想像以上につらいこと。このような状況を多くの人に知ってもらうこと、そしてどうしたら変えていけるのかといった課題に、取り組んでいきたいと思っています。また、NGOという立場を生かし、市民の声を政府に届ける架け橋になることが私の願いです。

ヨルダンの親たちの絵本づくりの研修。どんなメッセージを載せるか、子どもたちに伝えたい思いをディスカッション



Information

フリトレー ☆みんなに笑顔を☆ キャンペーン実施中

ジャパンフリトレー株式会社様は6月1日から7月31日の間、定番6商品についている応募券を1枚1口としてハガキに貼って応募すると、1口につき10円がアジアの子ども支援事業に寄付されるキャンペーンを実施してくださいます。

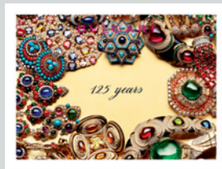
J&Jバンドエイド支援活動実施中

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社様は、ベトナムでのケガ予防プロジェクトをはじめとするSCJの活動への支援として、6月1日から12月31日の間、バンドエイド全商品で売上の一部をご寄付くださいます。

ブルガリ、創立125周年記念 初の回顧展を伊ローマで開催

ブルガリ様は、創立125周年のハイライトとして回顧展「"Between Eternity and History"永遠と歴史の狭間で」をローマで開催します。年末、収益全額がSCに寄附されるスペシャル・チャリティがNYで開催されますが、そのコレクションの一般公開と合わせて、500点以上に上る歴史的なアイテムが一堂に会します。

パラッツオ・デルラ・エスポジツィオーネ美術館（ローマ、5/22-9/13）



Topics／最近のできごと ～お伝えしたいことが、まだまだあります～

越川芳枝スタッフ、 4月よりベトナム事務所に赴任

「経済的な急成長を遂げるベトナム社会には、貧困と格差、障がいを持つ人の生計手段の確保、母親から子どもへのエイズ感染、母乳の普及と栄養向上など、さまざまな課題を抱えています。今、SCの世界連盟が一丸となり、ベトナムの子どもたちの生活向上のために、効率のよい、そして質の高い事業を進めています。今後ともどうぞよろしくお願いします」



越川芳枝スタッフ

Information

SCJ推薦の映画「子供の情景」が 全国で順次公開中

舞台はSCJの事業地でもあるアフガニスタンのバーミヤン。戦争が長く続くこの国で、子どもたちはいったい何を見てきたのでしょうか？ 撮影当時、弱冠19歳だった女性監督ハナ・マフマルバフが、アフガニスタンの子どもの今を瑞々しい感性で訴えかけます。

「子供の情景」公式サイト：
http://kodomo.cinemacafe.net/



主人公は6歳の女の子

SCJ近畿地区協議会 チャリティコンサートを開催

3月14日、今年14回目を迎えるチャリティコンサートとパーティーが、SCJ近畿地区協議会の主催で、大阪倶楽部にて開催されました。今回のコンサートは、ヨーロッパを拠点に活躍中のピアニスト吉川隆弘氏をお招きしました。チケット売上と募金をあわせ、多額のご寄付をくださいました。

第3回トート・アズ・キャンバス チャリティーイベントが開催

4月1日から12日、各界著名人88組がデザインしたトートバッグ「トート・アズ・キャンバス」のオークションが開催され、これまでの最高金額である2,065,380円が「Rewrite the Future ～いっしょに描こう！子どもの未来～」キャンペーンに寄付されました。



各界の著名人が描いたトートバッグが並ぶ



会場の表参道ヒルズ







素敵な絵を描いてくれたマヘラちゃん

World's Picture
どうしても載せたかった写真

スーダンの少女の宝物

津田知子（SCJスタッフ）

写真の女の子はマヘラちゃん（推定年齢8歳）です。スーダン・ダルフール地方の避難民キャンプの子どもセンターを視察した際に出会いました。子どもセンターでは識字教室や遊びなど様々な活動を実施していて、その日も15名が参加していました。その中で巾着袋を背負ったままゲームに参加している彼女がとても印象的でした。

巾着袋の中には、鉛筆と鉛筆削り、小額のお金と紙束が入っていました。雨にうたれた後に乾いたのか、しわくちゃの紙束には練習したアラビア語や絵が書かれていて、彼女にはそれが何よりも大切なものだとのこと。

キャンプではしゃぎながら遊ぶ子どもたちは、日本の子どもたちと何ら変わらないように見えます。しかし、彼らは「紛争」や「難民」といった私には想像もつかないような過去を持ち「今」を生きている――。子どもが銃撃を受ける人の姿の絵を描いた時などにそれを実感します。

同じ地球上の仲間である彼女たちは、現在も紛争が続くスーダンで「今」を懸命に生きています。

Editor's Note
編集後記

「子どもの宇宙」（岩波書店）という本の冒頭で著者の河合隼雄氏は、「一人ひとりの子どもの中には、無限の広がりと深さを持って宇宙が存在しているけれども、大人はつい忘れがちである」と語っています。今回インタビューを受けてくださったERAの浅井稔さんは真逆の人。インタビュー中、「日本の子どもに必要なものは？」という質問に、「子どもをあるがまま受け入れることのできる大人」という迷いのない答えが戻ってきました。こういった方々と協力してお仕事をさせてもらえることに喜びを感じます。

岡田 茜（SCJスタッフ）



発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

www.savechildren.or.jp